

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト第19号

act

art,
culture,
tradition

19

February 2015

踊ろろう
北の大地のコンテンポラリー



コンテンポラリー ダンス

ダンスは、ダンサーだけのものだろうか？ 鍛え抜かれた身体だけにゆるされた表現だろうか？ そんな問いに、ひとつの答えをくれるのが、コンテンポラリーダンス。1980年代前半のフランスで起こった舞踏芸術運動を皮切りに、これまでにないダンスが作られ始める。時には車椅子に乗ったまま、時には微動だにせず、あらゆる方法で肉体をつかい、表現をする。今も進化しつづけるダンスのかたち、それがこのダンスの流儀。

ゼロからつくる。身体でつくる。

型がない。リズムもない。ないからこそ、ゼロからつくる。

ゼロから生まれた美しさや、おかしさ、恐ろしさはきっと忘れられない感動になる。



みているだけじゃもったいない 踊ろう、つくろう、 コンテンポラリーダンス

きまった型がなく、いつも進化している。じぶんの身体に、出会いをおす。そんなこともできるかもしれない、自由なダンス。コンテンポラリーダンスは国や地域、振付家(コレオグラファー)によって様々なつくり方がありますが、札幌で生まれる作品を入口にコンテンポラリーダンスが生まれるまでのプロセスをのぞいてみましょう。

ダンサー・振付家

櫻井ヒロ流の作品プロセス

2/14～15に開催された「北海道コンテンポラリーダンスエキシビジョン」

参加作品の制作過程とは？ 作品化までの流れの一部をご紹介します。

切り口

作品の切り口を見つける

今回は街中のベンチに座っている無関係な人同士の動きに面白さを見つけ、作品化できないか考えたのがきっかけ。「切り口やアイデアは日々の生活の中で発見することが多いかもしれません」と櫻井さん。



「コーヒーショップ」というお題でひとり10種類の動きをつくり、面白い動きを探していく。

「発見したアイデアをそのまま表現しても面白くないことが多い」(櫻井さん)。アイデアを作品へと昇華するには、実際に動いてみてどう見えるのかという「実験」が欠かせないという。



舞台衣装はテーマを伝える重要な要素。今回は紙袋の「仮面」がキーワードになる?



舞台上で起こっていることを観客が受け取るまでに必要な「時間」も計算しながら作品をつくりあげていく。

実験

+αのエッセンス

櫻井さんの振付に大きく関わってくるのがこの二つの動き。エッセンスをつなげることで出来上がるシーンもある。



バントマイム

言葉は使わず、身体の動きだけでそこにはないはずの壁や物を観客に想像させるパフォーマンス方法。身体技術はもちろん、動作への観察力も必要となる。



Photographs by yixtape

作品

構想から約4か月かけてつくりあげた作品は約20分間の上演となった。「日常の動きの面白さから始まり、「仮面性」や動作から生まれるコミュニケーションというモチーフに出会った。作品づくりを通して伝えたかったことが深まり、成長した感じだ。言葉を使わずに表現するから見えてくる世界が、またひとつ生まれたようです。

【インタビュー】

INTERVIEW

ダンサー・振付家・ファシリテーター、時には役者。

札幌で様々な活動をする櫻井ヒロさんに、

コンテンポラリーダンスの魅力について聞いてみました。

自由だからこそ、 答えを探す楽しさがある。

コンテンポラリーダンスはいろいろな表現の仕方があり、つくり上げる方法もほんとうに人それぞれですが、僕自身は身体的なコミュニケーションに注目していることが多いような気がします。たとえば今作っている作品は伝えたいテーマがあって、それを身体で表現する…というのではなくて、日常的な一場面での人々の動きが面白く見えたことからつくり始めました。知らない人同士がベンチに座ってそれぞれ本を読んだり煙草を吸ったりしている場をたまたま見ていた時に、ふとした瞬間に同じタイミングで咳をしたり微妙にシンクロしたり、しなかったりする。それを僕はなんだか面白いと思ったけれど、それをそのまま舞台上で再現しても、観客にその面白さを伝えることってけっこう難しいんです。そこで、どうすればこの面白さを伝えられるだろうか?と身体を使っている試してみています。そのうちに、そもそも何をどうして「面白い」と思ったのか?「面白い」の正体ってなんだろう、という問いが生まれてくるんです。そういう問いは、すでに形式化されている時間や身

体の動きをバラバラにして、新しい目で物事を見られるようになる。舞台を観た人にもその目を一瞬でも持ってもらえればと思うんです。コンテンポラリーダンスの表現は自由度が高い。その分、作り手が「いい」と思えるものを本気で探さなきゃいけないんだと思います。コンテンポラリーダンスにはまた違う一面があって、コミュニケーションを主体にしたダンス、「コミュニティダンス」というジャンルもあり、僕はそのファシリテーターとしても活動しています。札幌市教育文化会館で行われた「高齢者と共に作るダンス」というワークショップ・公演をきっかけに年齢も性別も、ダンス経験者か否かも関係なく集まった人々で「教文コミュニティダンス部」を作りました。手さぐりの状態でワークショップを開催したり、ストリートパフォーマンスやアウトリーチを行い、「札幌の私達のコミュニティダンス」の模索は続いています。ダンスをダンサーだけのものせず、社会の繋がりについて考える窓にする。コンテンポラリーダンスはそういう魅力があるものだと思います。

PROFILE

櫻井 ヒロ

[Hiro Sakurai]

舞踊家、パフォーマー、演出家

フランス在住時(2006～2008年)からフィジカル瞑想という名前のワークショップを始め、以後身体や意識を使って他者とのコミュニケーションを図る形を模索。「コンテ」で講師を務めるほか、教文でコミュニティダンスのファシリテーターとしてワークショップやアウトリーチを行っている。



教文から発信! ダンスファシリテーター

札幌市教育文化会館「ファシリテーター(指導者)育成プログラム」

教文ではダンスを鑑賞するだけではなく、もっと身近に生活に取り入れられる手引きをする「ファシリテーター(指導者)育成プログラム」を実施してきました。

ダンスワークショップ

年齢・性別・職業もさまざまな参加者が集まるコミュニティダンスのグループが、教文を拠点に定例のミーティングやワークショップを開催しています。

アウトリーチ活動

学童保育所、デイケアサービスセンター、グループホームなどへ出向き、ワークショップなどを開催しています。

ダンスシンポジウム

今年で5回目を迎えるダンスシンポジウム。毎年2月に全国からダンサーやコーディネーターを招き、地域でのダンスのあり方について語り合い、ワークショップで理解を深めています。

その他の活動

「オペラ体操」「外部売り体操」「狂言ラジオ体操」「ハンブンニンゲン〜教文お面舞踏会」など、芸術・芸能に関する体操やイベントを制作し、普及する活動をしています。



CONTE とは?

今回の取材の中心の場所となった「CONTE Dance & Bodyworks Center」。

札幌でコンテンポラリーダンスを語るにははずせない「コンテ」のプロデューサーにお話を聞きました。

通称「CONTEコンテ」と呼ばれるダンススタジオ兼イベントスペースが誕生したのは2012年。コンテンポラリーダンス、舞踏、ボディワークなどのジャンルを得意としたダンススタジオは札幌には珍しく、定期レッスンやワークショップ、公演や勉強会・交流会の開催など、活発に活動しています。「現在、観たり習ったりする多くのダンスは、商業化されたダンスが主流です。僕たちが行っているのはダンサーがそれぞれの想像力や個性を発揮できる場所をつくること。演劇に近いか

もしれません」と、CONTEプロデューサーの森嶋拓さん。今年は道内外、さらにニューヨークからもダンサーが参加する『コンテンポラリーダンスエキシビジョン』の運営にも大きく関わりました。「2～3年に1回の間隔で開催できればと思っています。準備期間を長く設けることで、作品のスケールが広がっていくと思うんです」。北海道のダンスを北海道物産展のように道外に持っていき、そんなイベントも企画中。これからの活動が、さらに期待の「コンテ」です。



森嶋 拓 Taku Morishima

CONTEプロデューサー

16歳でストリートダンスを始め、19歳の時にTV東京系列「RAVE2001」の全国大会決勝に出場、プロダンサー・インストラクターとして活動を始める。「飛生芸術祭 TOBIU CAMP」などのイベントでダンスディレクター、コーディネーターとしても活動。2012年にフリーで活躍していたダンサー達と共に「コンテ」を立ち上げ、北海道のコンテンポラリーダンスシーンを広げるべく、ワークショップや公演など様々な企画・プロデュースに力を入れている。

ダンス公演

もうもうプロデュース

『麗しき日々、昭和レディ』

日時 3月28日[土]

1回目16:00～ 2回目19:00～

料金 1,500円(1drink付き)

定員 各回定員20名

会場 CONTE

札幌市中央区北5条西25丁目4-18
フジヒロ北5条ビルB1F

出演 牛島有佳子と昭和レディ5

〈昭和レディ5〉
伊藤さやか 上野千恵 海原章子 小鹿道子 佐々木理恵

